

「龍善寺遺跡出土の貝殻の塊」

今回は、中高津二丁目にある龍善寺遺跡の発掘調査で出土した、縄文時代の貝殻の塊について取り上げます。そして、そこから読み取れる遺跡周辺の水辺の環境や、縄文人が貝類を利用した様子についてご紹介します。

龍善寺遺跡は平成15年から16年にかけて、台地上にある遺跡の一部が発掘調査されました。その結果、25軒の竪穴住居跡や300基を超える木の実などを蓄えた貯蔵穴が見つかり、縄文時代の大規模な集落跡であることが分かりました。市内ではこのような貯蔵穴を多数もつ集落跡が、今から4500年前の、縄文時代中期中頃に多く見られます。

本題の貝殻の塊は、数多く見つかった貯蔵穴の中の一つから出土しました。この貯蔵穴は直径2m、深さ1mの円筒形で、当初の役割を終え、自然に埋まる過程で貝殻の塊が捨てられました。この貯蔵穴からは縄文時代中期中頃の土器も出土しており、ほぼ同時期に貝殻の塊が捨てられたと考えられます。

発掘調査では、この貝殻の塊を土ごと取り出し、ふるいにかけて詳しく調べてみました。すると、その貝殻のみの重さはおよそ6・5kgでした。そして、貝殻の選別を行うと、そのほとんどがウミナと呼ばれる小さな細身の巻貝で、らせん状のしま模様が特徴的です。この貝殻の総重量は6・4kgを超え、全体の99%を占めていました。これらのウミナは、体長は3cm前後のものが目立ちました。また、貝殻の表面に焦げたような黒い附着物が残るものも見られました。

この貝殻の塊にはウミナのほか、わずかながら海水域に生息する二枚貝のオキシジミや、淡水域に生息する巻貝の力ワニなども含まれていました。

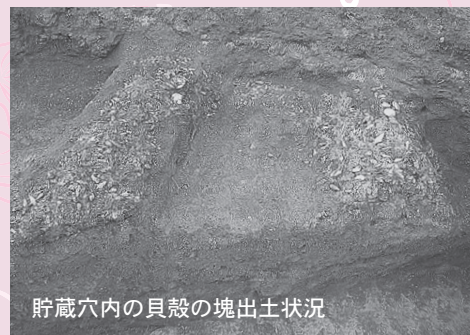
一般的にウミナは、海の湾奥に形成された干潟などを主な生息域とする貝とされ、今でも北海道の一部をのぞいた全国各地の干潟などで生息が確認されています。また、現在の日本国内ではウミナが食用として店頭に並ぶことはないようですが、隣の韓国では地域によつてこの貝が店先に並び、塩ゆでにしたうえ、尖った貝の先端を折り取つて、中身を取り出して食べるようです。

このようなウミナの特徴をもとに想像をたくましくすれば、龍善寺遺跡の周辺地域の水辺にも海水が及び、潮の干満の見られる干潟が形成されていたと考えられます。そして、縄文人が干潟に生息するウミナを採取し、土器を用いてゆでたり、蒸し焼きにして食べる姿も思い浮かべることが出来ます。

龍善寺遺跡の貝殻の塊は、とても小さな塊ですが、現在の私たちに縄文時代を考えるヒントを数多く与えてくれます。

今回ご紹介した貝殻の塊の一部は、3月24日(土)から5月13日(日)まで開催の第12回企画展「上高津貝塚の歴史的環境」で展示します。

岡考古資料館 ☎826・7111



貯蔵穴内の貝殻の塊出土状況

